地域活性化事業交付金
活用事例集

相模原市　緑区

目　　次

地域活性化事業交付金とは･･･ 1

橋本地区
1　着物で文化「メモリーフォト」事業･･･ 3
大沢地区
2　地元の冊子作製及びイベント実施による地域活性化事業･････････････････････ 5
3　旧笹野家住宅の保全活用による地域活性化事業･････････････････････････････ 7
4　こども食堂さくらんぼ事業による地域活性化事業･････････････････････････････ 9
城山地区
5　城山カブトムシの里プロジェクト･･･ 11
6　若葉台住宅の魅力づくりと情報発信事業･････････････････････････････････････ 15
津久井地区
7　花を植えよう事業･･･ 19
8　休耕田を復活し、災害に強い棚田を守る事業･････････････････････････････････ 21
9　道志川写真コンテスト･･･ 23
10　津久井こども食堂の開催･･･ 25
11　自治会脱退抑制及び自治会加入促進事業･････････････････････････････････････ 27
12　津久井湖城山イルミネーション事業･･･ 29
相模湖地区
13　One day trip ハイキングロード相模湖･････････････････････････････････････ 31
藤野地区
14　認知症予防のためのウォーキングと体操の会による地域活性化事業･････････････ 33
15　「なぐら湖畔の森」整備による子どもの遊び場作り事業･････････････････････ 35
16　２０２１年てってＣａｍｐによる地域活性化事業･････････････････････････ 37
17　地域のフリーペーパー「里山へっず」の発行による地域活性化事業･････････････ 39
18　地産ガチャによる地域活性化事業･･･ 41
19　子ども達の居場所と地域交流の場づくりによる地域活性化事業･････････････････ 43
20　“米づくりは人づくり”田んぼが育む地域コミュニティ活性化事業･････････････ 45
21　伝統玩具を通して世代間交流を促すプロジェクトによる地域活性化事業････････ 47
22　藤野地区の田園風景再生と自給自足生活のモデル事業･････････････････････････ 49
23　日連・青田地区環境整備による地域活性化事業･････････････････････････････ 51
24　金剛山山道遊歩道を守る地域活性化事業･････････････････････････････････････ 53
25　藤野　農林福藝連携プロジェクト　基盤整備による地域活性化事業･････････････ 55

地域活性化事業交付金とは

■地域活性化事業交付金とは、より多くの市民の参加と協働による地域の活性化を目指し、本市のまちづくりを進めてきた２２の地区で展開される市民による自主的な事業に対して交付される交付金です。

■対象事業

・地域の防災･防犯に関する事業
・地域の保健･健康づくりの増進に関する事業
・環境の保護･保全に関する事業
・地域の文化･伝統の振興に関する事業
・地域福祉の増進に関する事業
・産業や観光の振興に関する事業
・青少年の健全育成に関する事業
・生涯学習に関する事業
・地域及び地域活動の情報発信及び広報に関する事業
・区が推進する重点事業
・その他地域のコミュニティづくりを目的とし、区長が特に認める事業

■優先的な交付対象事業

・自治会への加入促進
・公共的な活動への参加者増加
・まちづくり会議が提示した地域課題の解決
・地域における公共的な活動の担い手育成
・地域の公共的な活動団体間の連携強化

■交付対象とならない事業

・政治活動、宗教活動又は営利活動を目的とする事業
・交付申請を行う年度において、相模原市が実施する他の補助制度等の対象となる事業
・政策提案又は講座等の開催を主たる目的とする事業
・調査、研究を主たる目的とする事業。ただし、地域の活性化に資する事業に繋がる計画があるものを除く。
・第三者への事業促進を求める事業
・前各号に掲げるもののほか、区長が適当でないと認める事業

■交付金の申請者は、原則として交付金の趣旨に合致する事業を行う５人以上の構成員で組織される団体とします。申請にあたっては、事業を実施する地区の各まちづくりセンターへ事前にご相談ください。

■当該年度の事業実施期間は、４月１日から翌年３月末までとします。また、同一の事業に継続して交付する場合については、３年を限度とします。

■交付金は、次の経費を交付対象とし、その交付率は１０分の１０以内とします。

・事業に要する消耗品費、郵便代等の通信費、印刷製本費等
・事業を行う上で必要な食糧費（交付対象者の構成員に対するものを除く。）、備品購入費、施設使用料、備品借上料等
・事業を行う上で必要な施設等の光熱水費等
・事業を行う上で必要な委託費等
・イベント等の開催時に掛ける保険料、警備費等
・講演会等の講師に対する報償費
・研修会の旅費等、研修に要する経費（交付対象者の構成員個人の資質向上に対するものを除く。）
・その他事業遂行に必要な経費であって区長が必要と認めるもの

※備品（物品等で１件１万円以上の財産）にかかる経費の交付率は、対象経費の３分の２以内となります。

着物で文化「メモリーフォト」事業　橋本地区

団体名：さがみはら着物ＤＥ文化フォト部

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

橋本地区は、急激な都市化が進み、本来家族間や地域間で育む「日本文化の豊かな知恵」や「季節を重んじる心の育成」、「通過儀礼」など文化への親しみが薄れてきていると思われます。また、橋本七夕まつりといった地域のお祭りや橋本地区の地域活動への参加を通じ、子供会・自治会加入者の減少や、地域を共に盛り上げようという「地域愛を感じる心の豊かさ」が希薄化してきていることを危惧しています。そのような地域課題を感じている着物スタイリスト、カメラマンなどの有志が集まり話し合った結果、仕事の現場で、家族内での孤立や経済的理由などで成人式や七五三の記念写真などを撮れないといった声をよく耳にするという話があがりました。経済的理由等から成人式や七五三の記念日に思い出を残せない若者や子供に地域で手を差し伸べることで、地域の和や人の和を感じてもらい、次世代の地域活動の担い手を育てたいという想いから活動を始めました。

２　事業の目的

ひとり親家庭といった経済的な理由で、成人式前撮りや七五三の記念撮影ができない方々への子育て支援として、本人と家族の思い出になるようなボランティアの写真撮影会を実施します。事業の実施にあたり、着付けやヘアメイクなどを学んでいる若者たちに参加してもらい現場体験や地域活動への参加体験を通じ、ボランティア意識を高めることを目的とします。また、撮影会を通じて、参加した子供たちに「七五三の時に自分が地域の人たちから親切にしてもらった」といった人や地域への感謝の気持ちを知ってもらうとともに、着物を通じて和のアイデンティティを育て橋本七夕まつり、各自治会、子供会など地域イベントへの興味や参加など、地域活性を次世代へと継承していくことも目的とします。

３　事業の実績

10 月 17 日に、「ソレイユさがみ」を会場とし撮影会を実施しました。今年度から新たな取組として、児童福祉施設を利用している子供たちを参加費無料で招待し 10 名の方に参加いただき、結果、成人式写真 13 名、七五三写真 10 名の撮影会を実施しました。新型コロナウイルス感染症予防を考慮した事業実施といった苦労はありましたが、昨年度、参加できなかった方に参加いただき感謝の声をかけていただいたことや、児童福祉施設の子供たちからお礼の色紙をいただき、施設職員の方から、「子供達に文化的写真を残してあげられる余裕も支援も今までなかったので、子供達一人一人が大切にされていると感じられる機会が得られるこのような事業をぜひ続けてください」というお声もいただきました。

４　事業の成果

参加いただいた方のご家族、付き添いのお友達などには地域活性化の意義、大切さを知ってもらうきっかけの場になりました。今年も市の支援事業のネットワークよりも民間のネットワークによる周知の方が効果を得ました。特に、ひとり親支援団体の方が一人一人へ直接周知いただいたおかげで、必要な方にダイレクトに情報が伝わり参加いただけました。今年もプロの着付け師の方々に講師としてご助力いただき、効率とサービス向上を図りながら、学生ボランティアスタッフの指導にも当たっていただきました。学生の皆様には、自身が学んでいる技術で、地域の人が喜ぶ様子を直接、感じていただき、地域への貢献がどれほど大切なことであるか意識を高めるきっかけになったと思っています。ボランティアスタッフの募集の際に、ご協力いただいた相模女子大学と東京工芸大学にも、この場をお借りして感謝を申し上げます。

５　事業実施団体による自己評価

自身の生業と並行しながら、この着物で文化「メモリーフォト」事業を準備し実施することは、肉体的にも精神的にも非常にきつい状況でしたが、続けることで地域でも徐々に知ってもらい、事業を心待ちにしているというお声を頂くことができました。また、今年度、新たな取組として児童福祉施設にお声がけし参加いただいたが、大変喜んでいただき自分たちの事業は地域の役に立っており間違っていなかったという自信に繋がりました。橋本地区を含め相模原市全体には、より手厚い支援を必要とする子供たちがいるという現状を知り、多くの方の力を借りて継続し、更に活動の範囲を広げる必要があると感じております。

６　今後の展望

地域活性化事業交付金は終了となるため、地域民間企業やご賛同いただける方を探して継続としていく計画でしたが、コロナが長引いている中、子供の文化支援までできる地域企業がなく、事業の継続に苦戦を強いられております。しかしながら、経済的理由や家庭環境に問題があり、七五三や成人式といった日常の祝い事の思い出を残せない若者や子供に、本事業が「社会との繋がりを知ってもらうきっかけ作りの場」となっていると自負しており事業を続けねばと考えております。来年度は社会福祉協議会の制度などを活用しながら事業を継続しつつ、全市的な活動に発展することを目標にＮＰＯ法人化の検討を進め、また、コロナ禍により社会全体が難局状態にある今、やはり事業の継続には行政の力をお借りする必要性があると感じており、今後も地域の問題を協働し解決に導くため、共に模索していただけますことを節にお願い申し上げます。

地元の冊子作製及びイベント実施による地域活性化事業　大沢地区

団体名：古清水歴史ガイド編纂委員会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

古清水地区は、世帯数約 500 世帯、自治会加入世帯約 400 世帯（加入率約 80%）で、他地区と比較して加入率は、高い状況です。

しかしながら、ここ数年来、自治会加入者が減少傾向にあるため、地域の歴史愛好家が集まって、地元の良さと特色でもある自然・歴史・名所・旧跡・伝記・風習等を周知し、「住めば都」を喚起する冊子を作製することを思いつきました。

また、当該冊子の内容等を関連イベントとして開催することで、昨今あまり機会がない世代間交流の場が設けられ、次世代へ歴史・文化を伝承する場として、参加者に地域の温もりを体感してもらったり、住民相互の親睦や連帯感の高揚等につなげたり、地域の活性化が図れると考えました。

２　事業の目的

冊子を作製することによって、地元の自然の素晴らしさ歴史・名所・旧跡・伝記等だけではなく、これまで地域内では知られていなかった事象についても、次代を担う子ども達にも伝承し、多くの地域住民に周知することを目的としています。

また、石焼き芋等のイベントを随時に開催することで、地域の温もりを体感していただくとともに、何よりも、地元愛を育み、自治会等の地域活動の必要性が意識付けられることを目指しております。

３　事業の実績

古清水地区は、かつて自治会加入率 80%を誇っていましたが、ここ数年来、減少傾向が続いたため、地元の魅力である自然・歴史・旧跡・伝記等を掘り起こし、加入への気運が高められるような冊子作りを考えました。

令和２年度及び令和３年度に、当委員会のメンバーが、独自に実施した調査結果を基に、関係者の絶大なる協力を得て、写真入りの見やすいカラー刷りで、散策時でも携行ができて、誰でも手軽に活用できるガイドブック形式の冊子を印刷し、発刊後に自治会員へ配付することができました。

４　事業の成果

地元の歴史愛好者５名で、編纂委員会を立ち上げ、大沢まちづくり会議のプレゼンテーションで了承を得た後、まちづくりセンターからアドバイスを受けながら、３ヶ年にわたる事業を展開しました。全ページカラー刷りの写真入りとし、今まで紹介されていない歴史的資料を掲載し、紹介されていても一部の人しか知らないような情報をカバーしました。

近隣自治会や関係団体からも問い合わせがあり、地元愛の高揚に向けた期待が膨らむとともに、関連イベント等の地域の活性化に向けた事業への活用も可能になったと考えています。

５　事業実施団体による自己評価

聞き（言い）伝えだけの歴史伝承ではなく、現地確認を基に、掘り起こした資料・情報を写真・活字で表現したことで、地域活性化に貢献できるべく冊子になりました。

掲載できなかった多くの資料については、まとめて自治会館に備え付けることも検討しています。

この冊子が起爆剤となり、他の地域でも同様の冊子作製の気運が高まり、地域活性化につなげていければと自負しています。

６　今後の展望

今後は、NHK 大河ドラマの「青天を衝け」、「鎌倉殿の 13 人」のロケ地になるなど、自然豊かなこの地域が注目されていることから、今年 11 月に、冊子発刊を記念し、相模川エリア「大島・向原・小倉・葉山島地域観光振興推進協議会」と共催の古清水歴史ガイドツアーを実施する方針です。

旧笹野家住宅の保全活用による地域活性化事業

大沢地区

団体名：旧笹野家住宅を考える会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

旧笹野家住宅は、平成 27 年度、市に建物群と屋敷が寄贈され、主屋と長屋門が平成 27 年 11 月に国の登録文化財となりましたが、それまでは、所有者の不在などで 10 年近く空き家状態となっていました。

当会は、市教育委員会の「旧笹野家住宅保存活用ワークショップ」を契機に、ボランティアとしての清掃活動と地区の貴重な文化遺産の維持・継承と活用を図るため、平成 29 年度に発足いたしましたが、前年度に続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で、魅力発信事業よりも建物群と屋敷の清掃等を中心に事業を実施しました。

奥室の整理・清掃とゴザの取り換え

２　事業の目的

国登録有形文化財となっている「旧笹野家住宅主屋と長屋門」及び敷地内にある文化遺産と自然環境の保存と活用を図るために、旧笹野家住宅に親しんでいただける見学会等の事業を行うことにより、まちづくりに寄与することを目的としています。

大沢公民館「みんなの作品展」

３　事業の実績

4 月、7 月、10 月、12 月に、定期清掃や除草など旧笹野家住宅の維持管理を 8 回(延べ参加者 121 人)実施しましたが、維持管理事業と旧笹野家住宅に親しんでいただくイベント(見学会など)は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で中止しました。

旧笹野家住宅の魅力を発信するため、会報「やまく」12 号～16 号及び「年度事業報告書 3」を発行・配布。15 号は、大沢地区自治会連合会に会員への回覧周知を依頼し、市文化財研究協議会や文化協会、大沢公民館などの事業を通じて、市民への笹野家の魅力発信を行いました。

文化遺産(書)の調査は、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、実施できませんでしたが、令和 2 年度の樹木調査の結果をもとに、笹野家の植物紹介パンレットを発行しました。

４　事業の成果

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策と天候不順により、予定の過半数の活動が実施できませんでした。

特に、人を集めるイベントは、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で、自粛せざるを得ませんでしたが、旧笹野家の文化的意義や考える会の活動は、会報や市文化財研究協議会や文化協会、公民館活動などを通じて、市民に周知することができました。

５　事業実施団体による自己評価

植物紹介パンフレット

今年度は、地域活性化事業交付金制度の最終交付年度であったが、施設を活用するために計画した、地元自治会との連携事業や健康づくりウォーキングは、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で中止することとなりました。こうした中にあっても、前年度に引き続き、旧笹野家住宅の清掃や簡易補修、除草や竹藪の整備などを住民による主体的保存活動として実施することができました。

６　今後の展望

地域活性化事業交付金制度に基づき、この 3 年間で実施した「旧笹野家住宅」の定期清掃や除草など、旧笹野家住宅の維持管理に係る事業については、地域住民による主体的保存活動として、引き継ぐことが可能かもしれません。しかし、当会の大きな目標である国登録有形文化財となっている「旧笹野家住宅主屋と長屋門」及び、敷地内にある貴重な文化遺産を活用し、維持・継承を図ることについては、事業規模を見直し、改めて市の関係部局と調整を行うなど、達成に向けて努めてまいります。

こども食堂さくらんぼ事業による地域活性化事業　大沢地区

団体名：さくらんぼ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

社会が進化していく中で、人間関係が希薄になり、生きづらさを抱える人が多くなっており、家庭の事情でこどもだけで過ごすこども、行き場のないこども、食事をとれないこども達がいます。

以前から、県営大島団地周辺では、欠食状態のこども達が存在しており、地域の課題と認識していました。

特に、給食が無くなる長期休暇は心配です。個人的に、知人のこどもに食事提供をしてきた経過もありますが、広く食事提供をしたいという思いから、「こども食堂」の設立に至りました。

近隣の高齢者は独居の方も多く、「こどもと触れあっていないので、こどもと会話をすると楽しい。元気がもらえる。」という声を聞き、世代間交流事業もできたら良いと思いました。

また、こどもが家で一人では、なかなか宿題ができないという声もあり、大人が見守って宿題などができる居場所を作りたいと思いました。

２　事業の目的

こどもが１人でも来れる居場所、地域住民との交流ができる居場所づくりを目的とします。

また、週に１回ではありますが、栄養価を考えた手作りの温かい食事を提供することで、こどもの健康増進と健全育成、保護者の負担軽減を目指します。

３　事業の実績

自らの店舗を利用して、令和３年の夏休み前から令和４年３月末までの約９か月、毎週金曜日の放課後、親が帰宅するまでの間に、食事がとれない地域のこども達を対象に、弁当を無償で配布する、こども食堂事業を実施しました。

・延べ回数：31 回
・延べ利用児童数：1,062 人

４　事業の成果

地域内では、既にこども食堂事業を展開する団体が活動されており、ある程度の需要があることは把握していましたが、弁当の提供状況から考えても、相当数の潜在的な児童がいることがわかりました。

高齢者とこどもたちとのふれあいの場を設けることも計画していましたが、店舗の空き部屋を利用して、一時的に場所を提供することもできました。

この事業を通じて、近隣の自治会長とも話ができるようになり、交流の場として、集会所を提供しても良いという有難いお話をいただくこともできました。

５　事業実施団体による自己評価

市の社会福祉協議会や市の関係者も、利用者に聞き取りをしてくれていたと思いますが、「この事業を始めてくれて良かった。」という複数の声を耳にし、実施して良かったと思っています。

６　今後の展望

これだけニーズがあると継続する必要もあると痛感しており、令和３年度の経験を生かして、次年度以降は、さらに円滑に事業が展開できるよう努めたいと思います。また、市の社会福祉協議会とも調整して、こどもの居場所事業についても検討していきたいと考えています。

城山カブトムシの里プロジェクト

城山地区

団体名：昆虫文化を子供たちに伝える会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

・城山地区は、自然豊かな地域であり、昆虫が住みやすい里山が広がる場所であるが、あまり知られていない。この自然豊かな里山は、市民や市外の人々に対しても観光資源として大きな価値をもつ。
・現在の子どもたちは、社会環境や生活様式の変化に伴い、外で遊ぶ機会や世代間・異年齢の交流が少なくなっている。
・城山地区の地域資源である里山を活用し、子供たちがカブトムシと直接触れあう体験学習を行う。また、子ども同士、親子のふれあい、交流機会を持たせるとともに、自然環境の大切さ、生命の不思議と大切さを実感してもらう。さらに、市内外の方々に対しても、観光資源としての認識をもっていただくための活動を継続的に行う必要がある。

２　事業の目的

・カブトムシの採集、飼育の体験を通じて、子供たちに生物への科学的興味、生命の不思議と大切さ、自然環境保全の重要さを実感してもらう。キノコ産業から発生する産業廃棄物（廃菌床や廃原木）、製材業から出る廃棄オガクズと馬術部からの廃棄馬糞をカブトムシの幼虫がエサとして成長すること。幼虫が成虫になった後は、それらが畑の肥料として利用されて、土に還ること。いわば、『カブトムシの SDGs』が実現していることを子供たちに理解してもらう。

・子供同士、親子のふれあい、交流機会の創出。
・城山地区での昆虫文化の活動を基にして、緑区の自然環境を活用した観光資源の開拓を将来的に図る。

３　事業の実績

◆5 月 7 日、5 月 11 日
相模女子大学幼稚部保護者会からの要請により、園庭内にカブトムシの飼育場＆産卵場となる木製の箱を設置。年長組の園児達に、カブトムシの生態と飼育方法についてのお話をした。
◆7 月
相模湖リゾートの依頼により、富士急トラベル主催で、相模湖プレジャーフォレストにおいて、3 回にわたり開催される 1 泊 2 日の「リアル昆虫採集」に協力。
◆10 月 23 日
小松コスモス園にて「秋のカブトムシ教室、～幼虫をもらって育ててみよう～」を開催。32 家族の親子が参加。
◆10 月 24 日
相模原市民会館共催で「秋のカブトムシ教室、～幼虫をもらって育ててみよう～」を開催。19 家族の親子が参加。
◆10 月 27 日～31 日
もみじホール城山ギャラリーにて「第 2 回昆虫文化のつどい」を開催。
◆10 月 16 日、10 月 30 日
城山公民館にて「昆虫標本作製体験会、～昆虫の保存技術を習ってみよう～」を開催。21 家族 62 名が参加。
◆10 月 31 日
もみじホール城山にて「第 3 回昆虫講演会」を開催。
◆11 月
ＦＭさがみで本会の活動内容が紹介される。
◆12 月 4 日
相模原市民会館にて「第 2 回昆虫講演会」を開催。
◆12 月 13 日～12 月 19 日
緑区合同庁舎 1 階ロビーにて、子どもの昆虫体験ポスター、なら枯れ調査結果などのポスターを展示
◆1 月 21 日～1 月 31 日
アリオ橋本において、子どもたちの昆虫体験ポスターなどを展示する「新春昆虫文化のつどい」を開催。城山地区の観光スポットを説明するパネルも設置し、観光振興に寄与した。
◆3 月 5 日
第 29 回城山公民館まつりにポスターを展示。会の活動内容と城山地区のなら枯れをドローンで撮影した結果を示した。

◆3 月 8 日
相模原市民活動サポートセンターからの依頼により、ＦＭさがみの竹中通義のホットモーニングに午前 9 時から約 10 分間生出演。本会の活動内容の説明、3 月 20 日、3 月 27 日に行う「第 2 回昆虫文化フェスティバル」、「カブトムシ教室 in アリオ橋本」の解説と参加の呼びかけを行った。
◆3 月 20 日
城山かたくりの里前の広場にて「第 2 回昆虫文化フェスティバル」を開催。事前予約の 50 家族（161 名）と予約なしの当日客 52 名が来場した。参加費の中に、かたくりの里入場券を含めたことで、カタクリの花を初めて見る来場者もおり、地元の観光振興に貢献した。
◆3 月 27 日
アリオ橋本において「カブトムシ教室 in アリオ橋本」を開催。市内外から 54 家族、106 名の親子が参加。

４　事業の成果

昆虫教室、昆虫講演会、昆虫標本作製体験会などへの子供たちの参加者は。昨年度より増加したことで市民の関心が深まったことが分かる。

相模湖プレジャーフォレストでのリアル昆虫採集には市外、県外からも多くの観光客が参加し、昆虫文化が地元の観光振興に有効であることが証明された。

さらに、FM さがみで本会の活動及びイベント情報が放送されたことにより、イベントの参加者が増加した。また、本会の活動及び城山地区の情報発信に繋がった。

５　事業実施団体による自己評価

カブトムシを中心とした昆虫文化の紹介は、多くの子供や保護者の関心を集め、毎回のイベントに大多数の参加の申込みがみられる。子どもの教育、地元の観光振興、里山復活という３つの目標を掲げて出発した『城山カブトムシの里プロジェクト』の目的は、多くの市民の理解が得られ、達成されつつある状況にあると考える。

また、アンケートを実施したことにより、参加者のニーズの把握等、今後の事業展開に参考となる情報を得ることができた。

６　今後の展望

昨年度の活動内容を引き続き行いながら、新規に城山地区雑木林でのリアル昆虫採集、自然観察会、川や雑木林の手入れなどを積極的に進め、城山地区の活性化を実現したい。これらの活動を行うことにより、コロナ禍で家に閉じこもりがちな子供を里山に連れ出し、本当の自然と環境の教育をすることができる。さらに、緑区の観光事業の振興を図ることができる。地元の関係するさまざまな団体や行政組織などと情報を共有して、多くの方の協力を得て進めていきたい。

多世代が安心して幸せに暮らせるまちづくり「若葉台住宅の魅力づくりと情報発信事業」～若葉台住宅環境整備協働事業（法政大学×若葉台住宅を考える会）～

城山地区

団体名：若葉台住宅を考える会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

若葉台住宅は、周囲に昔ながらの里山風景を残し、都心を一望出来る高台に位置している。緑に囲まれ、地域内に幼稚園や小学校があり、子育て世代にも良好な住環境だが、高齢化率が 57%と市域内で最も高い住宅団地である。持続性のある魅力的な住宅とするために、環境の良さを維持しつつ新しい住民を誘致し、活性化された住環境をつくりあげることが最優先課題となっている。

２　事業の目的

住民の過半数が高齢者であるため活動力を確保するために、法政大学の学生との協働事業により、地域の課題を解決し団地の振興を図る。（エリアマネジメント活動）

接種予約 学生代行

まちづくり 交流の縁

相模原 高齢６割の地区

住民（右）からの代行予約申し込みを受け付ける学生ら（相模原市緑区若葉台で）

高齢化率が６割と上北相模原市緑区の若葉台地区で９日、高齢者に代わってインターネットで新型コロナワクチンの集団接種を予約するため、法政大の学生ボランティアが住民宅を訪問した。今後も続けるという。住民は「若い人と触れ合えるのは助かる」と喜んでいる。（中谷和義）

鎌倉市24か所 予約支援会場

一方、鎌倉市は、17日から始まる高齢者向けの新型コロナワクチン接種の予約で、市内24か所にサポート会場を設置する。市職員がインターネットでの予約が難しい住民の支援にあたる。

接種加速へ 推進課新設

相模原市 予約回線も増強

新型コロナワクチン接種推進のため、相模原市は、17日から開始する高齢者向けの予約受付に備え、5月末までに約5万人分の予約を完了させる。市は、接種推進課を新設するなど、接種体制の強化を図る。

市は9日、接種推進課を新設し、専門職を含む職員を配置する。市内の保健所や各支所などに、専門職を含む職員を配置する。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

市は、高齢者向けの予約受付は、市ホームページ（HP）のほか、専用コールセンターでも受け付ける。

３　事業の実績

（１）若葉台の旧商店街の一角にある遊休店舗を借りて、住民交流の場「YY わかば」をオープンし、半年間の試営業を行った。（令和３年度新規事業）

この半年間の間に 47 日間の定期開業、10 日間の臨時開業を行い、合計 1,000 人弱の利用があった。

さらに、この実績により次年度以降も継続して「YY わかば」を開設できることになった。

（２）法政大学の学生とは「朝市への応援」「YY わかばの開設」「学校林もりっくの整備」などを通じて、積極的な関係を持つことができた。また、新型コロナウイルスワクチン接種の予約活動を通じて、当会の活動に対する住民の理解も深まった。（自力で予約することが困難な高齢者 70 人ほどの予約を代行）（継続事業）

（３）広陵小学校学校林もりっくの整備（令和３年度新規事業）

まちの貴重な緑である学校林もりっくの整備を学校、地区住民、会員と合同で実施し、崩れていた階段を 70 段ほど補修した。この場所を利用する小学生や地区住民の安全を確保するとともに、途切れそうになっていた学校林の整備活動の伝統を復活することができた。

（４）新型コロナウイルスの蔓延により各種活動は自粛を求められたが、感染防止に努めながら積極的に広報にも努めた。毎月ポスターを掲示して当会の活動のＰＲを行い、参加人員の拡大を図った。

４　事業の成果

商店が無く、孤立した形の若葉台住宅地には運転のできない高齢者が多数居住し、大勢の買い物難民が存在している。その人たちのために、毎週朝市を開いて利便性向上に寄与している。遠く三浦三崎漁港からも当会活動に賛同した 3 商店が毎月出店に来てくれている。また、新型コロナウイルスで自宅にこもりがちな高齢者に積極的に家から出てもらうことでフレイル予防にも寄与している。

法政大学の学生と協働で事業を始めることで、住民に若い人のパワーを感じてもらい、学生たちには、社会貢献の実績を積んでもらっている。

新型コロナウイルスワクチン接種の予約活動は、新聞記事となって評判になり、市内南区からも依頼があった。他地区での予約活動の見本になることができ、さらに、この活動は大学内での表彰対象にもなった。

学校林もりっくは、小学校に隣接している自然林であり、以前より学校と地区住民が協働で整備を行っていたが、人事異動などでその伝統が途切れ、山道の階段が崩れ始めていた。危険を避けるために、学校と地区住民が一緒になって整備を行った。新型コロナウイルス蔓延防止のため、一斉整備は 1 回しか行えなかったが、70 か所の階段を補修し、安全確保と伝統の継続を図ることができた。

YY わかばをオープンしたことで、日常、居場所のない高齢者間の住民交流の手伝いができ、情報共有ができるようになってきた。また、この場所を利用してスマホ講座を開き、情報弱者である高齢者のスマホ操作を手伝い、孤立の防止を図っている。さらに、子ども食堂の弁当配給拠点として活用し、城山地区南地域の子どもたちの食問題をある程度解決することができた。3 月は 37 食を配食した。

５　事業実施団体による自己評価

地域活性化事業交付金の３期目（４年目）の活動だった。昨年は、新型コロナウイルスの様子を見るために、地域活性化事業交付金は申請せず、自己資金だけで活動したが令和 3 年度は第３期目として申請した。

しかし、今年度も新型コロナウイルスの感染防止活動等により、期間中の 2/3 は、活動の自粛を求められたが、朝市や YY わかば、もりっく整備などは感染防止に十分配慮しながら中止することなく継続実施した。根付いた住民間の交流活動を絶えさせないように、感染防止に気をつけながら活動を継続したが、参加できない会員も多くいた。また、年度の後半は、大学生も感染率が上がり、参加禁止になるなど大変な１年だった。

当初に予定していた活動が思うようにできず、予算を一部執行出来なかったのは、悔いが残る。

長年の懸案事項であった住民交流の場「YY わかば」をオープンできたのは、非常に大きな成果である。半年間の試営業で約 1,000 人の利用があり、店舗オーナーから今後の継続も認めてもらったことが今後の地区発展に繋げることができ、大成果である。

ここを拠点に今後、住民交流や他団体との交流、高齢者交通問題、空き家対策を行うことを計画している。

６　今後の展望

令和元年度に実施した「全住民アンケート」の結果をもとに、住民が切望している「商店の再開」、「交通問題」、「空き家対策」、「緑の保全」の４つを活動の中心に据えて、魅力ある元気な若葉台を復活させ、持続可能な団地づくり（SDGs　No.11）を目指す。

学生参加に関しては、年度途中で法政大学の保井美樹先生が逝去されるという思いがけない事態が発生し、今後の活動継続には懸念がある。従来は、ゼミ生が中心であったが、今後は、地域交流センターを中心に随時、地域活動に興味のある学生を募集して若葉台の地域活動に参加してもらう予定である。（既に、馬術部や佐野川 PJ、小松 PJ の学生団体との実績がある。）

学校林もりっくに関しては、令和４年度の当初から小学校の活動予定表に入っており、継続実施していく予定である。

花を植えよう事業　　津久井地区

団体名：花を植えよう会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

過疎化が著しい地域において、地域の活性化及び当地域の魅力アップ効果が期待できる事業が必要である。

２　事業の目的

休耕地の有効利用により当地域の魅力アップ効果を図り、同時に地域住民の交流を図る。

３　事業の実績

４月　畦、順路等の草刈り、役員会
５月　畦、順路等の草刈り
６月　畦、順路等の草刈り、麦刈り、脱穀
７月　田畑の耕運、青和学園種まき
８月　草刈り、耕運、コスモス種まき、
９月　コスモス草刈り、耕運
10月　青和学園写生大会、コスモス刈り取り、草刈り、肥料まき、耕運、麦の種まき
11月　耕運、麦の種まき、電気柵設置
３月　役員会

４　事業の成果

車やオートバイを止めて写真撮影をしている様子が見られるなど、地元以外からの花見客や写真愛好家が確実に訪れている。

今年度も、新型コロナウイルス感染拡大により、イベントが開催できなかったが、地域振興協議会や緑の休暇村、いやしの湯等と協力し地域活性化に向けた活動に貢献できていると感じている。

５　事業実施団体による自己評価

今年度も、コスモスの開花時期が天候によって左右されることから、種子を蒔く時期をずらしたり肥料の加え方等を工夫し、作業日数を増やし草刈り草むしりを行ってきた。例年以上の開花を迎えたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、イベントを開催できないという悔しい思いをせざるを得なかったが、例年見学に来ていただいている方や広報を見た方などからの問い合わせは数多くあり、励みとなった。

６　今後の展望

コスモス園を維持しつつ、青根地域の特産品を創出するような事業を展開していく。

休耕田を復活し、災害に強い棚田を守る事業　津久井地区

団体名：「農園会」

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

当集落は神奈川の水源を擁する自然豊かな環境にある。しかし、近年、自然と人間との生態系のバランスが崩れ始め、シカ・イノシシ・カラス・アナグマ・ハクビシン・キツネ等の野生動物やヤマビルによる被害が顕著になってきた。また、農業従事者の高齢化、罹病などで農耕に支障を来す事例も増えてきた。そのような状況下で、当会は棚田の広がる里山の景観を守るために、休耕田の阻止に努めるとともに、地域住民同士のつながりを堅固にしていく必要がある。さらに、地域の会員のみの活動には限界があるため、外部からの加入を呼びかけ、会員数を増やすことが課題となる。

２　事業の目的

休耕田をなくし、古里の棚田の景観を守ることや棚田を蘇らせることによって、有害鳥獣やヤマビルの被害を防ぐ。収穫したモチ米で文化祭にモチつきを行い、来客者との交流を図る。

酒米と津久井在来大豆を栽培し、共に、津久井ブランド化し、地域活性化の一助とする。

３　事業の実績

昨年度に引き続き、「津久井在来大豆」を栽培した。収穫した大豆で味噌を作り、11 月には住民に配って喜ばれた。3 月には、一般参加者も味噌作りを楽しんだ。

「酒米作りの会」と協働で、「青根酒米作りの会」を結成した。地元酒造会社とも連携し、青根産の銘酒を作る事業を展開した。

田植えには 60 名以上の参加者があった。

コロナ禍の影響で地域外の人たち（常連）との協力を得る機会が減ってしまったが、協力・協働態勢に揺るぎはなかった。酒米の栽培は初めての経験であったが、栽培技術を持つ協働・提携者の協力・指導を仰ぎ、開花期に天候不順に見舞われたが、まずまずの収穫を得ることができた（仕込み米 4 袋）。大豆の栽培は 2 年目であったが、株間と条間が短かったせいで密集してしまい、耕作面積（1.5ha）に比して収穫（20 kg）がやや少なかった。

４　事業の成果

休耕田をつくらない、里山の景観を守る、地域住民を元気にするという点で、津久井在来大豆と酒米の栽培は地域の実情や環境に適した事業であった。また、根小屋「酒米づくりの会」と上青根「農園会」との協働、通年にわたる一般の参加と住民の支援など、さまざまな人々との交流が盛んになったことで、地域の持続的可能性が広がった。

５　事業実施団体による自己評価

田植えと稲刈り・みそ作りは誰もがやり易く、主催者と参加者との交流が促進できた。特に地元の青根・青野原・根小屋・中野以外から多くの参加者が訪れたことで、酒米と大豆の栽培は、地域の情報発信の好材料になった。また、「酒米づくりの会」と「農園会」との協働、地元酒造会社との連携は、地域振興につながった。

６　今後の展望

「休耕田の復活」、「災害に強い棚田の保全」という目的で稲作を始めたが、今後、津久井産の酒米と津久井在来大豆の栽培へと事業転換を図り、他の組織や一般参加者との協働・提携を進め、地域全体が活性化することで「持続可能なまちづくり」を目指す。運営費は、事業で利益を上げ（生産物を販売し）、財源を増やす術を講じたい。

道志川写真コンテスト　　津久井地区

団体名：道志川写真コンテスト実行委員会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

道志川の自然は津久井中央地区のシンボルであるが、往時の流れからは水量も少なく、あゆの遡上もない。そのような中、上流域を含め、残された豊かな自然を後世に伝える意識、保護・保全活動の機運が高まりつつあることから、写真コンテストを通じ、当地を訪れ、ファインダーを通してみることにより、地域外も含め多くの方に道志川のすばらしさ、保護意識の大切さを再認識してもらうとともに、地域に生きる人々に改めて郷土愛を育む機会としたい。

２　事業の目的

道志川の魅力を広く伝えるとともに、後世に向けた記録保存と道志川及び周辺環境の保護意識の啓発を図る。

３　事業の実績

＜第 16 回道志川写真コンテスト＞

募集期間：令和 3 年 9 月 11 日（土）～9 月 26 日（日）
応募点数：68 点　　応募者数：20 人
審 査 会：令和 3 年 10 月 5 日（火）（審査員　8 人）
入賞作品：最優秀賞 1 点、優秀賞 5 点、佳作 10 点　＜合計 16 点＞
表彰式：新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するため中止
入賞作品巡回展　　5 か所

最優秀賞作品 ～輝く道志川～

４　事業の成果

＜入賞作品 16 点　常設展示＞　展示期間：令和 3 年 11 月 10 日（水）～
　会場：津久井生涯学習センター
＜同　巡回展＞　　展示期間：令和 4 年 1 月 7 日～3 月 3 日
　会場：南区ユニコムプラザさがみはら、中央区生涯学習センター、緑区合同庁舎等
　　全 5 か所

道志川流域の貴重な自然を記録・保存するとともに、入賞作品展示により、本流域を始め、津久井地域における自然の良さなどを広く伝えることができた。

５　事業実施団体による自己評価

巡回展示を実施し、南区等の区民を含め、多くの市民に対し、本流域等の存在と魅力をアピールすることができた。

こうした取組みを継続することは、写真撮影を手段とした津久井地域への来訪者の増加が見込め、また、新たな視点からの津久井地域の発見が期待できるなど、津久井地域全体の PR に多大な貢献ができる。

６　今後の展望

一昨年度から実施している巡回展示を拡大することで、市民への津久井地域の魅力発信が期待できる。募集点数を増加させる方策として、関係機関への更なる働きかけを実施することで、併せて津久井地域全体の PR になる。

津久井こども食堂の開催

津久井地区

団体名：相模原市食生活改善推進団体わかな会津久井地区

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

核家族化が進み、親が働きに出ることで、こどもの孤立・孤食化が進んでいる。そういった状況下のこどもたちを学校教育の現場のみで発見・支援することが難しくなっている。

２　事業の目的

上記の課題を少しでも解消していくために、地域でこどもたちを支える「こども食堂」を開催する。

３　事業の実績

わかな会津久井地区が中心となり、11 月は土曜日、12 月以降はいずれも日曜日の午前 11 時～午後 1 時 30 分、津久井中央公民館で開催。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、開催時間を第 1 部午前 11 時～午後 12 時、第 2 部午後 12 時～午後 1 時 30 分と 2 部制にし、定員は各 20 名先着順とした。

① 10 月 31 日（日） 中止（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため）
② 11 月 20 日（土） 第 1 部:21 名　第 2 部:16 名　計 37 名
③ 12 月 26 日（日） 第 1 部:8 名　第 2 部:9 名　計 17 名
④ 1 月 30 日（日） 中止（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため）
⑤ 2 月 27 日（日） 中止（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため）
⑥ 3 月 27 日（日） 第 1 部:7 名　第 2 部:9 名　計 16 名

４　事業の成果

新型コロナウイルス感染症の影響で、約 1 年半開催が出来なかった。

今年度も 10 月からの再開を目指したが、感染症感染拡大の状況を見て 11 月からの開催とした。再開後は、以前も参加してくれていたこどもたちが参加し、再開を楽しみにしていたことが感じられ、こどもたちの居場所としてこの場の必要性を再確認した。また、家族で参加される方もいらっしゃり、家族の交流の場としての機能も果たしていたと思われる。

５　事業実施団体による自己評価

本事業は３年目を迎えたが、その間休止期間があったとはいえ、この事業が地域内で浸透してきていることが感じられた。今後も継続して事業を進めていきたい。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で、食事だけの開催となってしまい、ボランティアとこどもたちが交流する場を設けることが出来なかったことや感染症の影響で活動が３回中止になったこと、参加者数が減少したことなどがとても残念である。

６　今後の展望

今後も新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策を取り、可能な限りこどもたちとのコミュニケーションを図りながらニーズを把握していきたい。また、今後どの様に運営し事業を実施していくか検討し、地域の団体とも連携を図りながら事業を展開していきたい。

自治会脱退抑制及び自治会加入促進事業　　津久井地区

団体名：津久井地区自治会連合会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

自治会加入世帯の高齢化等に伴い、自治会退会世帯が増加しており、本年度４月１日現在の加入世帯が昨年度に比べ津久井地区全体で 182 世帯減少している。

転入世帯については、自治会加入が進んでいないことから、未加入世帯の加入促進を図る必要がある。

２　事業の目的

昨年度に引き続き、少子高齢化に伴う単位自治会からの退会世帯の抑制に加え、令和 3 年度は、加入促進として未加入世帯へも配布し、防災意識の向上とともに、単位自治会の充実及び自治会活動の活性化を図る。

３　事業の実績

『２０２２年版 防災カレンダー』
10,300 部作成

2021 年 12 月初旬から、
単位自治会（61 自治会長）より
自治会加入促進活動として、
加入世帯及び未加入世帯へ、
防災カレンダーを配布した。

４　事業の成果

津久井地区自治会連合会において、津久井地区の自治会加入率の低下傾向を踏まえ、当該事業を継続的に実施することで、「自治会の大切さ」を伝えながら、脱会者の抑制及び新規加入活動を促進するなど、単位自治会毎の積極的な自治会活動への取り組みが期待される。

５　事業実施団体による自己評価

自治会活動の認知度低下や地域コミュニティの希薄化が進む中、自治会員自らが自治会への加入促進事業に取り組む姿勢は高く評価できる。活動を継続的に行うことにより、自治会加入率の維持・向上に繋がるものと考える。

６　今後の展望

自治会員の高齢化が避けられない状況の中、効果的な情報発信、参加を促す働きかけやIT ツールを有効に活用するなど、変化する住民の価値観やニーズ、新しいライフスタイルを考慮しながら事業を進めて行く。

津久井湖城山イルミネーション事業　　津久井地区

団体名： 津久井湖城山イルミネーション

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

津久井地域の観光資源である、津久井湖や城山を抱える津久井湖周辺も、冬季には観光客やハイキングに訪れるお客様も減少し、閑散としてくるため、この時期の津久井地域の魅力づくりや観光客誘引のための活動が必須となっている。

２　事業の目的

冬季の津久井湖城山公園（花の苑地）でイルミネーションを実施し、津久井の玄関口を明るく照らすことにより津久井城山地域の魅力づくり及び津久井地域の活性化を効果的に図る。また、イルミネーションを点灯し、地域の新型コロナウイルス感染拡大収束に向けての応援の灯とする。

３　事業の実績

今年の津久井湖城山イルミネーションは、11 月 20 日の点灯式後、翌年 1 月 30 日まで点灯し、来場される方に鑑賞していただいた。

新規のイルミネーション装飾として、栃の木 2 本の装飾（森の仲間たち）を始め、希望の鐘、球体 LED、芝生内に広がる光の広場、噴水オブジェ、観光センター2 階テラスからの光のシャワー（シャボン玉）などを設置して好評であった。

４　事業の成果

地域の商工会、公園協会、自治会、まちづくり協議会、津久井青年会議所、他の実行委員の協力を得て、「～未来の元気を、すべてのひとに～」をスローガンに実施した。

イルミネーション点灯式は、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、関係者のみで式典を開催した。点灯後の期間中は、平日 40～50 名程度、土日では、150～200 名程度の方が鑑賞に来られた。

今年も中野中学校の地域貢献による製作パネルがタウンニュース紙で紹介された。ローカルテレビのイルミネーション生中継番組やシークレット花火（津久井湖周辺）も行われた他、初日から 4 日間の津久井湖観光センター感謝デーにも多くの来場者が訪れた。

第 13 回目の今年は、創意工夫を凝らし、地域の身近なイルミネーションとして大きな成果が得られ、地域の活性化に貢献できた。

５　事業実施団体による自己評価

他の民間施設のイルミネーションと比較すると規模は小さいが、公益財団法人神奈川県公園協会や地域の関係者の理解のもと、点灯期間中は、公園駐車場を終日開放の協力を頂き、公園全体に LED 装飾を実施した。昨年に比べ来場者が 8 割程度増加したが、装飾用 LED 部品の経年劣化や破損個所も多く、今後継続するための対策が必要である。

６　今後の展望

事業継続のための方策として、（１）地域の協力体制の拡大・充実、（２）幅広い協賛金の協力要請の構築、（３）装飾用 LED の経年劣化への対策、（４）資機材部品の購入と破損対策などを実施する。

津久井地域の観光振興施設の玄関口で開催される本イルミネーションは、地域の活性化に特化したものとして、すべての来訪者に夢を与え、幻想的な空間の中、誰もが感動できる体験・参加型事業として位置付けている。今後は、前記の対策や方策を審議、検討した上で効率的に進めていく。

One day trip ハイキングロード相模湖

相模湖地区

団体名：相模湖観光振興の会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

現在、地域の観光客は減少し、活気が失われつつある。再び地域に活気を取り戻すため、観光振興が地域の重要な課題となっている。令和元年度の台風19号の被害で、石老山への登山ルートが崩壊したことにより、相模湖地区への観光客が落ち込んだ。再び観光客を呼び込むため、昨年度から新たなハイキングコースの整備に着手した。

２　事業の目的

新たなハイキングコースの整備は進んできたが、新たなコースへの案内看板の不足や、大明神展望台周辺では立木の成長により眺望が悪くなっており、展望台としての役割をあまり果たしていないことから、案内看板の設置と展望台周辺の立木の景観伐採等の整備を行う。ハイキングコースの整備とPRに取り組むことにより、観光客を増加させ地域の活性化を図る。

３　事業の実績

・登山道案内看板の設置

プレジャーフォレスト前のバス停近く及び、相模湖休養村キャンプ場入口に、大明神展望台入口への案内看板を設置。

・大明神展望台の整備

大明神展望台周りの景観伐採及び登山道の整備、登山口から大明神展望台までの登山道の小枝・雑草等の撤去作業を実施。

４　事業の成果

今回の大明神展望台入口までの案内看板の設置により、登山口までのルートが分かりやすくなったと登山客からの評判も良くなった。

大明神展望台周りの景観伐採及び登山道の整備により、台風 19 号で被害を受け現在も工事中である顕鏡寺ルートの復興まで、新登山道とし登山客数も増加しており、相模湖への観光客誘致への一助となっている。

５　事業実施団体による自己評価

登山道の整備については、途中の景観において、枝の伐採をもう少ししたい場所もあるが、展望台からの眺めは以前から比べると、相模湖及び東京方面も見渡せるようになり効果は十分と思われる。

また、案内板設置については、会員の皆様の協力により、的確な場所に看板の設置ができたことは、登山客にとって利便性の向上になったと思われる。

６　今後の展望

石老山では、令和元年度の台風 19 号の被害により、崩落した顕鏡寺周辺について、現在、神奈川県による治山工事が進められている。治山工事終了後に顕鏡寺側からのハイキングコースの復旧工事となる。次年度以降については、顕鏡寺側のハイキングコースの整備のほか、高尾山～城山～千木良ハイキングコースの整備、弁天橋周辺のハイキングコースの整備など、相模湖商工会、相模湖観光協会等他団体と連携し、ハイキングコースの整備及び観光 PR に更に取り組む。

認知症予防のためのウォーキングと体操の会による 地域活性化事業	藤野地区

団体名：３木会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

高齢者のための活動の場が少ないと感じ、悠遊シニアスタッフのメンバーを中心にウォーキング及び体操を実施して認知症予防に繋げたいと３木会を立ち上げることになった。

２　事業の目的

ウォーキングと筋力アップのための体操を習慣化し、体力・健康の維持を図ることを目的とする。また、仲間づくり、閉じこもりを防ぐことも目的とする。

３　事業の実績

年間を通して 9 回（4 月 15 日、5 月 20 日、6 月 17 日、7 月 15 日、10 月 21 日、11 月 18 日、12 月 16 日、1 月 20 日、3 月 31 日）のウォーキングを実施し、参加者は延べ 207 名だった。ウォーキングは、芸術の道の遊歩道、名倉地区、日連地区等で実施できた。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、中止とした時期もあったが、昨年度より多く実施することができた。

４　事業の成果

今年度もコロナ禍での開催となったが、仲間とのウォーキングは、運動不足解消、認知症予防のためにかなりの効果があったのではないかと思う。

５　事業実施団体による自己評価

毎月、大勢の方々の参加があり、ウォーキングによる認知症予防、健康に対する意識が高くなっている。また、この活動を通して高齢者の外出する機会を増やせたことで、閉じこもり防止や地域住民との交流の場を提供することにも貢献できた。

６　今後の展望

３木会としての活動を通して、「体力および健康の維持、健康や認知症に対する意識の向上」等を行うのではなく、参加者が個々にグループの輪を広げ活動できるよう支援する。

「なぐら湖畔の森」整備による子どもの遊び場作り事業による地域活性化事業

藤野地区

団体名：なぐら談会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

自然豊かな藤野地区であるが、子どもたちが安心して遊べる公園は、無いに等しい。まちづくり会議等でも、公園等が無いことの問題点は繰り返し指摘されてきた。しかし、現状ではその改善の見通しは立っていない。子どもたちの遊び場の提供は、喫緊の課題である。

２　事業の目的

2014 年以降、なぐら談会が整備を進めている「なぐら湖畔の森」をより安全かつ安心して子どもたちが遊べる場にし、また、希望する諸団体の利用に供することによって、地域活性化にも資することを目的とする。

３　事業の実績

今年度は、「なぐら湖畔の森」（以下「森」という）を子どもたちが安全かつ安心して遊べる場にするため、以下を実施した。

①「森」全体の草刈り、雑木伐採、間伐等

②「森」内部の防護フェンスの延長設置

③利用させていただいている駐車場の整備及び駐車場から「森」への進入路の整備

④「森」入口及び内部に「森」利用上の注意喚起看板を設置

⑤利用者の便宜を図るための椅子・テーブルセット４セットの設置

４　事業の成果

「森」の追加整備が終了し、安全かつ有効に利用していただくための条件は整った。また、昨年度発足した「なぐら湖畔の森で楽しむ会」において相互の情報交換をするほか、利用状況の確認等を行い、順調に利用者を増やしている。自然豊かでありながら、子どもが安心して遊べる場が乏しい藤野地区の現状において、本事業の公益性は高く、利用を通じて各団体が交流しあえるという意味で、社会貢献度も高いと考える。

５　事業実施団体による自己評価

「森」の利用者は順調に増えており、本事業は高く評価できると考えている。４名の地主との交渉には紆余曲折もあったが、使用契約を結ぶことができた。中山間地域には豊かな森が存在するが、近年では利用されないばかりか、放棄された状態の森も少なくない。そうした中で、「森」の取組は森の現代的な利用方法に一石を投じることにもなっていると評価している。

また、本事業を通じて、なぐら談会会員及びサポーター会員間の親睦が深まったことも、コミュニティの充実という意味で評価できることであると考える。

６　今後の展望

昨年度結成された「なぐら湖畔の森で楽しむ会」のメンバーである、なぐら談会、名倉子ども会、森の幼稚園「てって」、トランジション藤野森部、名倉自治会、名倉桂寿ゆめクラブの積極的な利用を図るとともに、藤野地区以外の子どもたちや諸団体にも利用していただけるよう働きかける。将来的には、一つの観光スポットにできればと考えている。

２０２１年てってＣａｍｐによる地域活性化事業　藤野地区

団体名：ふじの森のようちえん“てって”

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

近年、外で遊べる場所や人が減少している。

コロナ禍で生活環境も制限される中、子どもたちの成長・発達への悪影響も心配される。

このため、心身の健康と安心できる環境で、思いきり体を動かして遊べる機会をつくることで、子どもたちの未来につながる体づくりや思い出をつくっていく。

２　事業の目的

子どもたちが協力して楽しみながら自然に触れて学び、成長していくことを目的とする。

３　事業の実績

1 月：おおだ山荘にて「もちつき野外料理教室」を実施した。

3 月：「陣馬山登山体験教室」を実施した。

４　事業の成果

・野外料理教室や登山教室など、季節に合った体験を子どもたちに提供することができた。
・子どもたちに集団行動をさせることで、希薄になりつつある人と人とのつながりを体感してもらうことができた。
・登山を初めて経験する参加者が多く、また、おおだ山荘を初めて訪れる参加者が多かったため、藤野の豊かな自然や、名所を知ってもらうことができた。

５　事業実施団体による自己評価

本年度は、コロナ禍ということもあり、活動していくうえで困難な部分もあったが、「子どもたちが協力して楽しみながら自然に触れて学び、成長していく手助けをする」という目的は達成できたと考えている。来年度以降は、当初予定していた１泊２日のキャンプも社会情勢を鑑みて実施できればと思う。

６　今後の展望

今後も継続して活動を行う予定である。近隣の自然や歴史に詳しい方をお呼びして、理解を深めたり、卒業生・卒園生がボランティアやインターンとして参加し、サポートする側からも学び続けていけるよう、縦と横のつながりを大事にして、事業展開していきたいと考えている。

地域のフリーペーパー「里山へっず」の発行による地域活性化事業

藤野地区

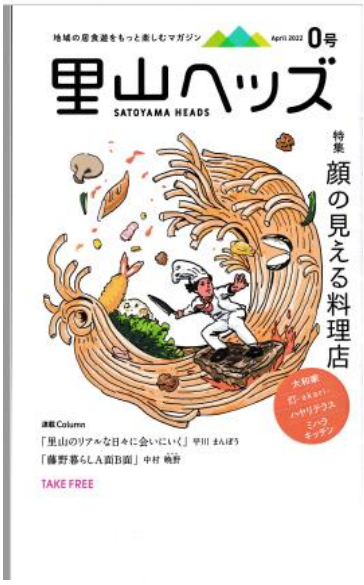
団体名：山シビレ研究所

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

都市や地方に限らず、地域の情報交換の要ともいうべきフリーペーパーが、この藤野地区には現在無い。フリーペーパーは、地域内の情報交換や文化やイベントの認知の役割と観光振興の両者を満たすことができる有用な媒体である。

また、昨今 SNS 全盛の社会において無くなりがちな偶然の出会いをもたらすという点で、紙媒体は有用である。さらに、ネット弱者でもある高齢者や IT から距離を置く自然志向の移住者にもしっかりと情報発信をすることができる。

藤野地区やその周辺で起きている数々の楽しみや新しい出来事をできる限り拾い集め、発信共有することでより多くの交流を広げていくことが基本的な目的である。



２　事業の目的

- 地域のイベントや催事の他、店舗や施設を含め、情報を広く認知してもらうこと。
- 地域内のみならず、観光振興にもなるような情報発信の実現。
- フリーペーパーをできるだけ多くの人とってもらい、発行部数をできる限り伸ばし、媒体として自立すること。

３　事業の実績

フリーペーパーを 2,500 部制作し、自治会回覧及び新聞折込にて、広く配布した。また、スーパー等の店舗と交渉し、配置していただけることになった。

４　事業の成果

藤野地区の情報を詰め込んだフリーペーパーを広く配布できたことにより、ネット弱者である高齢者や、IT から距離を置く自然志向の移住者たちに藤野地区の魅力や情報を知ってもらう手助けができたと考える。

また、地域住民とともにフリーペーパーを制作することで、地域住民同士の交流を促進する手助けもできたと考える。

５　事業実施団体による自己評価

完成品には大変満足であり、多くの方に藤野地区の魅力を知ってもらえる機会を作れたことは、地域に貢献できたと自負している。

今後は、より多くの人の手に渡るよう、配布方法を工夫し、事業を継続していけるよう、広告収入についても検討していく予定である。

６　今後の展望

広告営業と配布場所の拡大を実践することで、発行部数の増加と同時に広告出稿の増加を計画している。藤野地区だけでなく、上野原、相模湖、高尾などの近隣地区との情報交換も拡大する予定である。さらには、同じ中山間地域である他県や海浜の田舎生活を紹介し、配布場所の拡大と交流を深めていく。

地産ガチャによる地域活性化事業　　藤野地区

団体名：地産ガチャ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

藤野地区の魅力を内外にカジュアルに紹介したいと考え、メディアとしても注目の集まるガチャを地産化して広めたいと考えた。

２　事業の目的

藤野地区の魅力を全国に発信し、地域経済の発展、人口の増加につなげる。
また、地域資源特産の周知、藤野地区の活性化も目的とする。

３　事業の実績

11 月　「おばあちゃんが描いた猫のカンバッジ」撮影
12 月　「樹木のキーホルダー」撮影
 1 月　「おばあちゃんが描いた猫のカンバッジ」販売
 2 月　「樹木のキーホルダー」販売
 3 月　「地産ガチャ」ホームページ公開

４　事業の成果

・相模原町田経済新聞への記事掲載、ヤフーニュースへの記事掲載
　知名度が上がり、地産ガチャを置いてほしいという依頼もあった。
・小規模多機能型居宅介護事業所「すずかけの家」に対する軽作業発注
・地産ガチャの設置場所拡大による、藤野地区の PR 効果の増加

５　事業実施団体による自己評価

今年度は時間も短かったため、メディア露出に対する準備期間と考えていたが、ヤフーニュースへの掲載などもあり、藤野地区の情報を拡散できたのではないかと思う。

６　今後の展望

設置数の拡大を藤野エリア以外で行いたい。また、エリア拡大による藤野地区の魅力発信。

子ども達の居場所と地域交流の場づくりによる地域活性化事業

藤野地区

団体名：藤野プレーパーク準備会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

自然に恵まれた地域でありながら、子ども達が安心して遊べる公園や公共施設が無く、子育て世代が交流できる場も無い。このため、昨今のコロナ禍によるライフスタイルの変化で、より孤独を感じている親子や移住者が増える中、完全ボランティアにて、事業をスタートした。

２　事業の目的

子どもの健全育成と子育て世代の孤立防止、地域交流の活性化を目的とする。

３　事業の実績

・2021 年 7 月に立ち上げ以来、月 2 回ペースで計 17 回開催、678 名参加。公園や児童館の無い藤野地区に、貴重な遊び場を確立した。
・地域の講師や経験豊富なプレーリーダーを招き、ユニークなワークショップやイベントを無料で開催した。（例：注連づくり、バウムクーヘンづくり、プレーカー）
・構成員のうち 3 名が相模原市プレーリーダー養成講座（上級救命講習含む）を修了、運営ノウハウの取得や安全性の向上に努めた。

４　事業の成果

・コロナ禍で息苦しい状況下、貴重な野外遊びの機会を多くの子ども達に継続的に提供できた。

・保護者や地域の大人にとっても良いつながりの場となり、例えば、移住して間もない人、発達障害児を抱える親、シングルペアレント、闘病中の人などにとっては、単に楽しい時間を過ごしてもらうだけでなく、人とのつながりや精神的な救いの場を提供できた。

・都内はじめ県外からの参加者も多く、藤野のアピールにつながった。海外出身の参加者もおり、コミュニティや日本に溶け込む良い機会になった。

５　事業実施団体による自己評価

特に怪我や事故もなく、限られたスタッフで完全かつ継続的に開催できた。

思っていた以上に参加者が増え、かつ多様化している。一般にプレーパークは近所の小さい子と母親という来場者が多く見受けられるが、藤野プレーパークは年代、性別、居住地、国籍、出身など非常に多様で、かつ初めての人でもすぐ馴染めるような、独特の家族的コミュニティ感が醸成されている。

来年度以降も、安全性の確保、遊びや運営のスキルアップに努めながら、より良い場を継続していきたい。

６　今後の展望

市主催のプレーリーダー養成講座を受講、修了する人員を増やし、その実施研修地でもある「銀河の森プレーパーク」の運営を市から委託されている NPO 法人子どもの居場所づくり・相模原（KIDS）所属とし、プレーリーダーが派遣されるシステムにする。

″米づくりは人づくり″田んぼが育む地域コミュニティ活性化事業による地域活性化事業

藤野地区

団体名：藤野関野・田んぼクラブ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

・農家の高齢化、後継者不足で藤野の田んぼも活用されなくなり、耕作放棄されること。
・自然を活用した無農薬の米作り、伝統的な田んぼ作業は、次代に継承する必要があり、里山のブランドになること。
・子どもたちに田んぼや里山を通じた自然との共生、食育、伝統文化を伝え、地域内外かつ多世代の交流する場・機会が少ないこと。

２　事業の目的

・田んぼ等藤野の資源の活用・維持
・地域内外・多世代の交流機会の創出
・地域交流活性化に資する作物の開発検討

３　事業の実績

5 月：田んぼの代掻きをし、泥んこ運動会を開催した。
6 月：田植えをした。
10 月：稲刈り、脱穀、籾摺り、精米をした。
12 月：餅つき、田起こしをした。

４　事業の成果

・今年度から田んぼが一区画（計約 380 ㎡）増えたが、メンバーが経験を積み、ノウハウを得てきており、連携し、年間を通じてスムーズに作業できた。
・新しいメンバーが増え、子供たちも増えてきたが、稲刈り、脱穀、餅つきなど、食育や日本の文化の継承などができた。

５　事業実施団体による自己評価

・コロナ禍で集まることもはばかられるなか、メンバーで注意して集まり、一人も感染者を出さずに作業ができた。また、もち米は、稲熱病にり患したが、メンバーでケアをし、収穫も前年並みと頑張った。
・体制を強化したことで、年間を通じて役割分担して作業することができ、半農半Ｘの理想的なスキームができつつある。

６　今後の展望

・水稲栽培→活動メンバーの拡大、特に地域外からの体験の拡大。
・小学生の遊び場、泥んこ運動会などの展開→他育児サークル等との連携。
・米以外の地元産品とのコラボレーション→他農家、他団体との連携、イベントへの展開。

伝統玩具を通して世代間交流を促すプロジェクトによる地域活性化事業

藤野地区

団体名：藤野昔あそびの会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

藤野地区は、子どもが遊べる公園や児童館等がほとんどなく、気軽に子どもを遊ばせることができずに困っている親が多い。大人も子どもも集まれて、気分転換ができ、楽しめるような場所の提供を「昔遊び」をテーマに創りたいと考えた。

昨年度は、月１回～2 回開催した。

２　事業の目的

昔の遊びを通し、大人と子ども、年齢や学校の異なる子どもたちが交流できる場を提供し、地域住民が体を動かし、頭を使っていきいきと楽しむことにより、心身の健康な育成及び世代間交流の促進を目的とする。

また、木や竹を使用した玩具製作には藤野地区の間伐材を使用する。

３　事業の実績

・事業の実施については、主に藤野プレーパーク準備会と連携することができた（場作り、集客、スタッフ見守り配置）。

・藤野昔あそびの会では、藤野の間伐材（主に竹や杉）を使い、昔ながらの遊びを存分に楽しんでもらうなど、特産を生かした遊びの提供ができた。

４　事業の成果

・コロナ禍で、緊張や息苦しさを抱える中、藤野地域の仲間と遊ぶ機会、大人と子供、地域の人々とつながる実感ができる機会を提供できた。
・コロナ禍で、仕事の減った藤野在住の芸術家や作家に講師の依頼ができた。

５　事業実施団体による自己評価

・昔あそびの会に参加したことで、「子供が学校へ行く意欲が高まった、親子の関係が良くなった、子供より親自身の方が楽しんだ」という感想をもらえた。今後も、手や道具を使った遊び、音楽を取り入れた遊びを自ら創造し、道具を作り出す遊びの楽しみを現代の子どもや大人に伝えていきたい。

６　今後の展望

・次年度以降も継続していく予定。今後は、SNS を積極的に活用し、参加者を募りたいと考えている。
・製作した玩具などを、ふじのね、藤野やまなみ温泉などで販売し、活動資金に充てることも考えている。さらに、遊び場を借りるのではなく、常設したいとも思っている。

藤野地区の田園風景再生と自給自足生活のモデル事業による地域活性化事業	藤野地区

団体名：藤野百姓チーム・でいだらぼっち

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

旧藤野町は急峻な地形の中山間地域であり、稲作用の土地が少ない。そんな中、湧き水の出る貴重な休耕田が日連地区の通称：古田（ふった）の田んぼという箇所が残っている。昨年１年目は、休耕田開墾、湧き水池護岸工事、法面の草刈りなどを行い、田んぼ周辺もだいぶ綺麗な田園風景が戻ってきた。高齢化の近隣住民の方々にも活動を認知していただき、人間関係構築が一歩進んだ。

しかし、１年目と言うこともあり、作付け面積は、5 畝程で、しかも長雨と９月の大雨の影響もあり、収穫米は約 100kg 程だった。新型コロナウイルスの感染や自然災害が増えてきているため、自給自足率を少しでも高めていけるような啓蒙活動を含めて、作付けを増やしていきたいと考えた。

２　事業の目的

・コミュニティで共同の田んぼを耕作することで、地域内で食料自給の意識を高める。
・子どもたちに食べ物を自作することを日常生活として体験してもらいたい。
・休耕田を耕し、里山の田園風景を復活する。
・昔ながらの稲作技術の継承。
・鳥獣対策。
・藤野地域内での食料自給率向上。

3　事業の実績

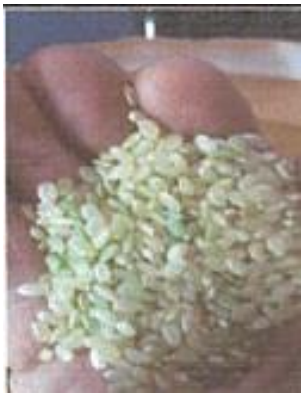
・4 月末
　ため池整備、田んぼ周辺の草刈り、田んぼの荒おこし
・6 月
　代掻き、田植え
・7 月、8 月
　水量管理、田の草取り、周辺草刈り
・10 月
　稲刈り、脱穀、籾摺り
・11 月
　収穫祭

4　事業の成果

・天然のため池を整備して 2 年目、無農薬、無施肥による稲作で、玄米約 100ｋｇの収穫ができた。
・本格的に稲作づくりに参加して、自給自足生活を志す家族が、1 年目は、4 家族（13 名）でしたが、2 年目は、8 家族（25 名）に増加。
・6 家族が藤野への移住者ということで、田んぼ周辺の住民の方々とコミュニケーションづくりが大事だと思い、積極的にあいさつや田んぼ周辺の草刈り、竹林の伐採のお手伝いを行った。

5　事業実施団体による自己評価

今年度は、前年比の約 2 倍に田んぼの面積を広げ、人数も大幅に増員となったが、長雨が続き、水量や水温などの満足いく管理ができず、目標の収量 200ｋｇのところ、最終的には 100ｋｇだった。残念な結果だったが、新規の方を含め、みんなで共同作業をし、地域コミュニケーションが図れたことが大きな財産となったため、2 年目としてはいい結果であったと思う。



6　今後の展望

・古田の田んぼ稲作面積計画：1 年目→5 畝、2 年目（今年度）→8 畝、3 年目→1 反

日連・青田地区環境整備による地域活性化事業

藤野地区

団体名：日連美花会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

少子高齢化や若い世代の地域離れに伴い、人口減少の傾向にあり、限界集落への動向を危惧している。

また、美しい里山の景観に恵まれながらも、人の気配が薄い場所は、防犯カメラを設置しても大型ゴミ等の不法投棄に悩まされているのが現状。

２　事業の目的

以前からの遊歩道を整備し自然豊かな日連地区をもっと多くの人々に知っていただき、「環境共生の里つくり」、「交流の里つくり」に向けて、地域全員が参加・交流出来る活動を目指す。

３　事業の実績

4 月：おおだ小径案内板の設置
5 月：花壇に植栽
6 月：日連神社境内に紫陽花苗木を植え付け
7 月：青田地区環境整備（道路への落石の除去等）
8 月～10 月：日連・青田の環境整備と花の手入れ
12 月～1 月：おおだ小径湖畔の手すり設置
2 月：おおだ小径の倒木撤去

４　事業の成果

日連・青田地区の美意識の向上に繋がり、ハイキングに訪れる人のポイ捨ても減少の傾向にある。コロナ禍においても、パンフレットや案内板の設置により、おおだ小径ハイキングコースまで足を運んでくれるハイカーも増えてきている。

５　事業実施団体による自己評価

日連アルプスハイキングコースやおおだ小径ハイキングコースに訪れるハイカーが増えて来て、無人販売所で何かを買い求めてもらえれば、多少なりとも地域の活性化に繋がると考える。ただ、大根や芋を並べるだけでなく、地域の名物品となる作物を皆さんに作ってもらい、どの販売所にも置いてもらい、地域の名物品に育て上げる。

また、山を利用し、専門家の指導を受けながらツリークライミング教室を開く等で地域の活性化に繋げていきたい。

６　今後の展望

この事業は、次年度以降も定着して地元住民（自治会及び美花会）で継続していく予定。

金剛山山道遊歩道を守る地域活性化事業　藤野地区

団体名：遊歩道を守る会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

金剛山を中心にハイカーが急増しており、当地区のハイキングコースの整備が必要不可欠な状況になってきた。ハイカーの皆さんが安全にハイキングを楽しんでもらえるように、整備等を実施する。

２　事業の目的

ハイキングコースの点検や整備を行うことで、当地を訪れた方が安全にハイキングを楽しみながら、藤野の自然の魅力を満喫してもらうことを目的とする。

３　事業の実績

4 月　金剛山山道整備、登山口法面の整備月
5 月　金剛山と日連方面の２班に分かれ作業
7 月　自治会主催事業協力、集会所赤沢口登山口
9 月　鉢岡山への遊歩道草刈り、杉峠にベンチ設置
10 月　宝山、日連山のベンチの塗装、金剛山山頂整備

４　事業の成果

コロナ禍のため、マスクを着用。作業時は、密にならないよう徹底した。

自治会の事業などにも協力したり、ハイカーの皆さんの安全を計るように実施した。

昨年度、金剛山の頂上に設置したカウンターでは、ハイカーが約 3,200 人と非常に多くの方に利用していただけた。

５　事業実施団体による自己評価

ハイカーの皆さんが安全に楽しんでいただけているのではないかと思っている。また、当会の活動を通じて、地域の皆さんと親睦を深められている。

今後も多くのハイカーの安全が守られるよう、整備を継続していく。

６　今後の展望

会の発足も浅く、足元を見つめながら当初の事業内容を確実に達成したく思い、当面事業内容を継続していく。

藤野　農林福藝連携プロジェクト　基盤整備による地域活性化事業

藤野地区

団体名：藤野農林福藝連携プロジェクト

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

藤野地区は、中山間地域であり、耕作放棄地となった畑や、自然と人家の境が接近してきており、鳥獣害被害の増加がある。また、手入れのされていない森林等（主に、植林されたスギ・ヒノキ）が多数あり、令和元年東日本台風 19 号による土砂崩れの原因の一つとなっている畑や山の整備の必要性は非常に高い。

また、人的な要素としては、高齢者率は、36%と高く、障害者福祉施設の数も他地域に比べると多い。施設としては都心部等と比べて就労の機会が少ない点なども課題としてある。

地域特性としては、芸術村構想から 30 年あまり、野外彫刻なども多数あり、日帰りのハイキング客などの流入もある。

これらの要素を組み合わせて、障害者や高齢者の活躍の場を作りつつ、地域の課題を芸術的な視点で解決していきたい。

２　事業の目的

日本の障害者率は、7.4%あり、活躍の機会がまだまだ福祉の充実した国に比べると少ない。SDGs の視点も含めながら、藤野地区での様々な活動においては芸術を課題解決にいかし、誰もが助け合え、輝ける地区を目指していきたい。

３　事業の実績

・11 月：木製のつみ木製作をテストで行った。木の乾燥が必要なため、昨年、くりのみ学園のメンバーと集めた木を素材としてカットし、やすりをかけた。
・12 月、1 月：コロナにより、メンバーの稼働が難しいため、商品作成の打ち合わせを行った。木の積み木に関しては、何パターンか作る中で、シュタイナー教育用の積み木も製作するために、ミツロウを塗った。
・2 月：木のコインのカット作業を実施した。
・3 月：緑区役所から、緑区イメージキャラクター「ミウル」のデータをいただき、焼印を作成し、木のコインを作成した。

４　事業の成果

・つみ木については、シュタイナー学園への交渉も行い、完成時には、販売の可能性が出来た。製作の在庫が出来れば、一定の売上も期待できる。
・アート作品については、打ち合わせと設計を行った。鳥獣害被害対策のため、音や光、匂い等の対策も合わせて検討している。

５　事業実施団体による自己評価

農林作業の実施等は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策等もあり、実施が難しかったが、スタッフ側でのテスト製作等を実施した。商品化や販売可能なルート（シュタイナー学園の通販サイト）なども発見でき、実際の商品化も可能になっている。課題としては、メンバーが実施する場合の作業の安全性の確保が必要である。

６　今後の展望

次年度は、さらに活動の幅を広げ、観光ルートとしての整備や、藤野観光協会との連携なども実践し、より活動を具体化していく。クラウドファンディングや一部作品などの販売も行い、自走化できるプロジェクトにしていく。

潤水都市 さがみはら

令和３年度実施

緑区地域活性化事業交付金活用事例集

編 集
緑区各まちづくりセンター
発 行
相模原市 緑区役所 地域振興課
相模原市緑区西橋本５－３－２１
電話 042-775-8801